

## 2024 年度後期 授業アンケートに対する文学研究科長・専攻代表からのコメント

### <文学研究科長・専攻代表からのコメント>

#### ■文学研究科長 大和田 攝子

大学院の授業アンケートは、回答者の匿名性を担保するために、回答者の属性を明らかにせず文学研究科全体の結果として集計している。そのため、授業担当者も専攻代表も、授業アンケートの結果が当該専攻の院生のものかどうか明らかではないという前提で、各自の授業を振り返ることにしている。こうした事情を踏まえ、各専攻代表からのコメントをもとに研究科全体として総括したい。

まず、授業アンケートの結果については、ほとんどの項目で肯定的な評価が得られていたという認識を全専攻の教員がもっていたことが伺える。各教員の自己点検・評価の内容からは、どの専攻も受講生一人一人の学習意欲や予備知識等に考慮しながら、柔軟に授業が展開されていたと評価していた。実際に、アンケート項目の中で「授業内容は、シラバス通りであった」に関して「どちらともいえない」が回答の過半数を占めていたが、「授業の運営方法などは、シラバス通りであった」については過半数が肯定的に評価していたことから、授業担当者が受講生に合わせて授業内容を柔軟に変更していたものと推測される。

ただし、授業アンケートにおいて、一部の授業運営に対して否定的な評価の記述がみられることが心理学専攻代表より指摘されていた。今後、授業計画の変更には、時間的余裕をもち、受講生に対してより丁寧に説明をすることが授業担当者には望まれる。

一方、授業改善に関して、国語国文学専攻では、基礎教育に重点を置いた授業を次年度より新たに開講するとのことであった。また、心理学専攻においては、多くの授業においてロールプレイや実際の臨床素材を用いるなど、受講生が実践力の基礎を身につけられるようさまざまな工夫が凝らされ、一定の成果が得られているとのことであった。今後も、受講生の学びの質の向上につながるよう教育体制のより一層の充実を期待したい。

#### ■言語科学専攻代表 大和田 攝子

本専攻の科目担当者、学生はともに1名のみであり、まさに最後の博士課程の学生となった。そのため授業は博士論文の完成を最大の目標に掲げ、それに適した学生主体の授業運営となったようである。具体的には、論文を作成する各段階において学生と活発なディスカッションを行う、執筆された原稿に対して詳細なコメントを加える、データファイルについて意見を交換する、積極的に学会発表をするよう伝える、といった熱心な指導が行われていた。とりわけ、周囲に切磋琢磨する学生仲間や、同領域で別の観点からフィードバックを与えてくれる研究者がほとんどいないという学修環境では、積極的に学会発表をして、そこで参加者と意見交換をし、新たな情報を得ることが研究を遂行する上で欠かせない。学生は博士論文の提出までに何度も学会発表を行い、貴重なフィードバックを得ることができたと担当教員は評価しており、結果としてすべてのことがうまく機能したと言えよう。

## ■国語国文学専攻代表 黒木 邦彦

1期のうちに得られる評価数は統計的にどうこう言える値いではないので、ここ数年の結果を踏まえつつ、コメントする。

今期もこれまでに同じく、ほとんどの項目で良い評価を得ており、全体的には問題が無い。各教員の自己点検評価を見ても、授業には毎年度工夫が成されており、授業運営も概ね良好である。学生の学習意欲や知識水準に考慮している様子も窺える。

本専攻は、基礎の理解や学術的文章の読解に重点を置いている。近年は所属学生も、各種研究会や、奈良女子大学、武庫川女子大学と共催している異分野交流会にて研究成果を積極的に披露しているが、研究力、具体的には、調査、分析、考察に求められる客観性、合理性を充分身に付けているとは言いがたいからである。基礎に欠ける学生にやみくもに議論させるよりは、本専攻が重視する基礎教育の方が実態に合っている。

近年の所属学生はほとんどが日本語教育を専攻しているが、その学術的背景は多様化している。本専攻はこのことを踏まえて、様々な指導法のもと、多彩な学習法も提示している。学生からの授業評価を見ても、学生の要望に合わせた授業の最適化は図られていると言えよう。

学生の子備知識が皆無に近いことを前提として、来年度からは、(人文)科学(的思考法)の基礎を一括して教える時間を早速用意した。教育体制には一層の充実が期待できる。

## ■心理学専攻代表 小松 貴弘

授業アンケート結果からは、各項目とも肯定的な評価が得られている。項目2「授業内容は、シラバス通りであった」に関してのみ、「どちらともいえない」が回答の過半数(9名中5名)を占めているが、項目3「授業の運営方法などは、シラバス通りであった」に対しては、肯定的な評価が過半数(9名中5名)であったことから、授業担当者が受講生に合わせて授業内容を柔軟に変更したという例がいくつかあったのかもしれないと推測される。一方で、「一部授業で運営が急なことがあり、計画的でなかった。」という自由記述があったことから、授業計画の変更に関しては、時間的余裕をみて、より丁寧な説明をすることに留意が必要と思われる。

各教員の担当授業に関する自己点検・評価票からは、多くの授業において、受講生のレディネスに合わせた授業の実施や、ロールプレイを用いるなど実践的な課題に取り組む授業、実際の臨床素材を用いた演習などを通じて、将来的に心理専門職として臨床の現場に出ることになる受講生が実践力の基礎を身につけられるよう、さまざまな工夫が凝らされ、一定の成果が得られていることがうかがわれる。また、発表の負担を軽減してディスカッションの時間を充実させる取り組みなどもみられ、受講生と教員のコミュニケーションをより活発化させるこうした取り組みも、受講生の学びの質の向上につながることを期待される。